

新発田歩兵第百十六聯隊奮戦記

【第3回】徐州に向う追撃戦

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

師団が滁縣占領当時、北支方面軍第二軍は、大黄河を渡り、済南を攻撃中で、師団が淮関、蚌埠、定遠附近に蟠居する敵に対して攻撃を加えることは、徐州方面の敵主力軍を牽制する為にも極めて緊要なことであった。

昭和十三年一月十八日、軍は愈々これを決行することとなった。師団は先ず敵を北方明光附近に誘致し、重点を左後方に保持し彼を淮河障害に圧迫捕捉する如く方針を確立し、師団は三縦隊に区分し絶えず左翼方面より該方面の敵退路を遮断しつつ淮河に圧迫するに決した。

本戦闘地は、山岳丘陵多く所々小流があり、道路は農耕の自然道に近く、橋梁は幹線道路のものは殆ど破壊され、他のものは概ね不完全であった。津浦鉄道は明光以北に於いては枕木軌道全部を取り外し、鉄橋は明光北側池河駅を始めその主要なものは悉く破壊されていた。天候は一月二十七日より、小雨、降雪、雨となり、作戦行動間泥濘となり、各種車両の行動は勿論、徒歩者の行動も容易ではなかった。

一月二十五日、聯隊は師団作戦計画に基づき、右縦隊の基幹となって明光附近の敵を攻撃する事となった。敵は河巾約百メートルの池河を利用し陣地を占領していたが、二十七日早朝、砲、独立工兵第三中隊の協力の下に池河を渡河し攻撃、対岸を占領した。敵はその後老季家、五里亭、趙家崗等の陣地によって頑強に抵抗したが、二十九日夜から退却を開始した。

聯隊は三十日朝までに完全に明光附近を占領し、続いて臨淮関に向って追撃に移った。

此の戦闘に於いて池河鉄橋を守備していた敵七名は、掩蓋内で枕を並べて全員戦死していた。如何によく死守したか又戦闘が如何に猛烈だったかが想像できた。

作戦行動開始前に得た敵情概要は、明光附近に二千、池河駅附近に千五百、その他鳳陽、定遠に各々二万との情報であった。

三十日追撃途中、燃灯寺の敵と衝突し之を攻撃、三十一日午後四時臨淮関東側地区に達し、大なる抵抗もなく入城。直ちに第二大隊、大隊砲一個小隊を、師団主力方面より退却

する敵の退路を遮断。退却部隊に甚大な損傷を与えた。

二月一日夜右縦隊長は、明二日津浦線に沿う地区を淮河の要衝蚌埠に向い追撃するに決し、第三大隊（山砲一個小隊、戦車一個中隊、通信一個分隊属）を先遣隊として夜半出発、蚌埠に向ったが敵と遭遇せず午後三時蚌埠に入った。

大隊は更に懷遠東側淮河渡河点に向い前進を命ぜられ即時出発、午後六時所命の地点に達し夜を徹した。三日朝大隊は、大なる敵なしと判断し独断渡河、懷遠を占領した。

師団が淮陽平地占領以来、敵は南方、北方に潰走し、我が聯隊正面にあつては、淮河北岸にその一部を停止、小蚌埠には二、三百の敵が堤防に陣地を占領し、絶えず我が宿営地に対し射撃を行った。

二月七日聯隊は、火力を以って対岸の敵に対し制圧するに決し、聯隊砲、歩兵砲、第一機関銃、軽迫撃砲を以って一五〇〇より約四十分間、徹底的に火力を発揚し敵を震駭させた。

二月八日聯隊は、渡河攻撃を実施する事となり、一八四〇より重火器全力を以って第一大隊の渡河に協力し、大隊は独立工兵第一聯隊の一中隊と協力、折疊船により敵前渡河を決行した。

一九三〇第一回渡河部隊は敵の大なる損害を受けることなく上陸したが、第二回以後遂次猛射を開始し、渡河動作を著しく妨害した。損害続出したが、渡河部隊及び工兵隊の力戦により上陸。堤防に拠る頑強なる敵は、手榴弾を以って死守し、僅か三メートルの堤防を挟んで両者壮烈なる手榴弾戦を演じた。部落内の敵は頗る頑強で苦戦となり、同夜は遂に之を占領することかなわず、

敵の猛射を冒して第一大隊は、第九、第十中隊、工兵小隊、独立機関銃中隊を増加し、又不足した弾薬の補充を行った。

二月九日、渡河部隊は小蚌埠掃蕩を開始したが、敵の有力部隊が北方より増加し、掃蕩進捗せず、敵の掃射、斜射を受け容易ならず大隊は再び堤防附近を確保し夜を徹した。

翌十日早朝、攻撃を開始し力攻。〇八〇〇小蚌埠を占領した。一五三〇歩兵第五十八聯隊第一大隊を増加し大隊の左翼に連繫し小蚌埠を確保した。

敵は二二〇〇臨淮関、小蚌埠、懷遠の我が守備隊に夜襲をして来た。小蚌埠にも約一個師団が来襲した。此の夜終夜に亘り敵の逆襲があり、特に第一大隊正面には約千以上の敵が肉薄し、一部は堤防附近に進入したが、十一日払暁各方面共敵に殲滅的打撃を与え一〇

〇〇完全に之を掃蕩した。

訓練未熟の敵は徒に混乱に陥り、我が守備隊の反撃によって千四百の屍体を遺棄して潰走した。爾後聯隊は附近の掃蕩、治安維持に任じた。

当時、敵の北支及び中支方面第一線に使用した総兵力、約百二十個師団で、その内三分の一は徐州方面に又四分の一は揚子江南岸に使用されていた。

隴海沿線は黄河の大障害と、堅固に築城され所謂「蒋介石ライン」と呼ばれ、単に北方のみよりの攻撃には相当の防御線を形成していた。しかし中支派遣軍の我が師団が、淮河北岸に進出した事により、敵を挟撃する為天与の態勢にあった。

大本营に於いては、敵が徐州附近に大兵力を集中し、ある好機を捉え南北呼応して之を捕捉撃滅せんとし、事変発生以来の一大機動作戦でその構想の雄大、その意義たるや誠に重大なるものがあつた。

北支方面軍は、台兒莊附近にて優勢な敵を攻撃中の第二軍をして、概ね五月上旬微山湖東西地区より徐州に向い攻撃前進、第一軍の一部をして五月中旬茫縣附近に於いて黄河を渡河し蘭封、歸徳間に於いて隴海線を遮断。

我が中支那派遣軍は、主力を以って北支方面軍と策応し、徐州附近の敵を同地西方地区に於いて捕捉撃滅する構想であつた。

(参考文献「新発田聯隊史」「聯隊歴史 歩兵第百十六聯隊」より)